

# SHOW HEY シネマールーム

★★★

## 私の知らないわたしの素顔

2019年/フランス映画

配給：クレストインターナショナル/101 分

2020 (令和2) 年2月29日鑑賞

シネ・リーブル梅田

### Data

監督：サフィ・ネブー

原作：カミーユ・ロランス『Celle que vous croyez』(Who you think I am)

出演：ジュリエット・ビノシュ/ニコール・ガルシア/フランソワ・シビル/シャルル・ペルリング/マリー＝アンジュ・カスタ/ギヨーム・グイ

### ■ショートコメント■

◆公式サイトによれば、本作の Introduction は次のとおりだ。

彼女はなぜ、別人に成りすましたのか。その先に何が待ち受けているのか——。驚愕の「真実」が明らかになった時、物語はまったく別の“顔”になる。

<24歳のクララ>と偽って知り合った若い男との疑似恋愛に溺れていく主人公クレール。理性を超えてはまり込んだその世界はジェットコースターのように二転三転しながら加速し、次第にクレールの心に潜む深層心理をあぶり出してゆく。

彼女はなぜ<24歳のクララ>に成りすましたのか？ 切なくも悲しい本当の理由とは？ その驚愕の「真実」が明らかになり、パズルの最後のピースがハマるとき、物語はサスペンスから一転、ひとりの女性の心理ドラマへと顔を変えていく。

原作は時計仕掛けのような複雑な構成と大人の女性の心理を描くことで高い評価を得る、フランスの作家カミーユ・ロランスの同名小説。監督サフィ・ネブーはフランスの名女優を得て、巧みな手さばきでヒッチコック作品を彷彿とさせるサスペンス映画を作り上げた。

観る者を試す衝撃のラスト。あなたはこれをどう見るだろうか？

50代のリアルな「私」と、24歳の「アバター」の間で自身を見失っていくクレールを演じるのは、フランスを代表する大女優ジュリエット・ビノシュ。「こんなビノシュは観たことがない」と評され、実力派女優の新境地と話題を呼んだ。

クレールの秘密を解くカギを握るのが、冷静沈着な精神分析医ポーマン。アップダウンする彼女を静かに受け止めながら、ポーマン自身も実体のない恐怖と対峙していく。演じるのは映画監督で女優でもある大ベテランのニコール・ガルシア。クレールとポーマン、女2人の心理合戦も本作の大きな見どころだ。

◆また、公式サイトによれば、本作の Story は次のとおりだ。

パリの高層マンションに暮らす 50 代の美しき大学教授クレール（ジュリエット・ピノシュ）。ある日年下の恋人に簡単に捨てられてしまったことをきっかけに、SNS の世界に足を踏み入れる。Facebook で〈24 歳のクララ〉に成りすまし、彼の友人アレックス（フランソワ・シビル）とつながったクレール。だが、アレックスと〈クララ〉が恋に落ちてしまったことで事態は思わぬ方向に転がっていく。そして次第にクレールは自分の正体を明かしたい衝動に突き動かされていくが.....。

◆そして、チラシには、「女はどうにも止まらない」とあるが、それを読めば、私のような団塊世代の老人はすべて、山本リンダの名曲「どうにもとまらない」（72 年）を思い出さず。そう、本作冒頭に、若い恋人リュド（ギヨーム・グイ）との激しいセックスシーンで登場した 2 人の子持ちの 5 0 歳代の大学教授・クレール・ミヨーは、ほんの出来心で足を踏み入れた SNS の世界にハマり込んだ後「どうにもとまらない」状態に陥ってしまったらしい。

もともと、SNS の世界では、クレールは本名と実年齢ではなく、24 歳の美しい女性クララ（ホントは姪のカティア（マリー＝アンジュ・カスタ）の名前で登録していたから、新しい恋人アレックスからいくら「会いたい」と言われても、それはムリ。しかして・・・？

◆Introduction も Story も、原作も読めば読むほど面白そう。また、「観る者を試す衝撃のラスト」と言われると、「どうにもとまらない」しかし、残念ながら、途中から私はため息ばかりに・・・。

とりわけ、後半になって素顔のままアレックスの前に登場してきたクレールに対して、アレックスが歳の差など何ら気にせずにホレこみ、即同居、激しいセックスを交わしている姿をみると、アレレ・・・？何じゃこれ？アレックスって男は、女でさえあれば誰でもいいの？あれだけ「君の声が好きだ」と言って濃密なテレフォンセックスを繰り返していたアレックスなのに、クララとクレールの声が同じだと気づかないの？本作のストーリー展開を見ていると、誰でもそんな疑問を持つはずだが・・・。

◆もともと、本作がそれなりに「観る者を試す衝撃のラスト」になっていることは間違いない。しかし、あまりにあまり・・・？

ちなみに、本作については次のようなボロクソの感想評価があったが、私も同感！

当代最も忙しい女優の一人ジュリエット・ピノシュが『ハイ・ライフ』と『真実』の間に出演した実にどうしようもない映画。若い恋人にフラれたピノシュが元カレの近況を探るため、Facebook に年齢と顔を偽って登録、元カレの友人と惹かれ合ってしまう、という展開から既にどうしようもないさが滲み出てくる。セラピストとの会話からの薄暗いフラッシュバックとモノローグという手法もどうしようもないし、一通り語った後にピノシュの妄想を延々と語り直す展開もどうしようもない。極めつけは付け加えたみたいなのラストのしょーもなさたるや。ANA ももう少し機内エンタメのラインナップ考え直してくれ。

2020（令和2）年3月5日記